歴史点描

岡藩史を読んで學ぶこと（一）

古藤田　太
（会員　弥生江良）

岡藩史は最初から面白い。岡藩初祖中川秀成の大坂に近い播州三木城十三万石を、秀吉は半分にして、当時の常識でも辟遠の地岡城の地をあてがわれた。まず秀成が九州に渡る前の父と兄のことに触れておきたい。

織田信長が本能寺で家臣の明智光秀に殺された。当時でも一大ニュースであったに違いない。信長の多くの家臣中一番の長は柴田勝家であった。才智にたけた秀吉は主殺しの光秀を山崎の戦に破り殺した。これにより柴田勝家と秀吉は必然的と云うか、自然か、両者は信長の後継者として戦うことになった。その戦が賤ヶ岳辺りの戦であった。

両者は対峙静観していたが、秀吉は一万五千の兵を従えて岐阜で柴田勝家の呼びかけに応ずる反乱の鎮圧に出掛けて行った。

一方、柴田勝家の将佐久間盛政も情報を得た。それは秀吉軍の中川清秀は砦の工事が遅れ、兵員も尠いと云うことで、盛政は今こそ攻勢になって先手をうつべきだとして大軍を率（ひき）いて賤ヶ岳大岩山砦を襲撃した。大将清秀は軍兵を励まし、数時間にわたっての激戦に清秀の軍勢は次々とうたれ、中川清秀も槍を持って奮斗したが遂に力尽き自刃して果てた。

盛政は戦の後は直ちに本隊に引き返すべく命じられていたが、命令に背き、戦場に一夜を明す。下臣の兵が窓を開けて見ると、明けきらぬ街道を見て驚き、あれは秀吉軍ではないかと云う。盛政が窓に寄って見ると驚いた。松明を点じて北国脇街道十三里を疾駆して本陣に帰還する秀吉軍の兵に相異ない。盛政は急ぎ帰還の準備を命じた。

秀吉は帰還兵に半時の休息を命じ、休止後直ちに賤ヶ岳遠征隊盛政軍の追撃を命じた。柴田勝正（盛政の弟）が盛政軍の殿（しんがり）であることに目をつけた秀吉は、子飼の

福島正則　加藤清正　片桐且元等に突撃を命じた。後世まで美名を残す賤ヶ岳の七本槍の活躍が演じられた。

勝家方として出陣していた前田利家勢の戦線離脱が始まった。これを見た各隊からも離脱が始って各隊の戦意はおとろえた。

この情勢を見て勝家の北ノ庄敗走となった。

四月二十三日北ノ庄城を取り囲んだ秀吉の大軍は翌二十四日総攻撃となった。妻のお市の方は勝家と死を共にする道を選んだ。炎上する天守閣で二人は刺し違えた。

さらぬだにうちぬるほども夏の夜の
　わかれを訪ふほととぎすかな
　　お市の方

夏の夜の夢路はかなき跡の名を
　雲井に掲けよ山ほととぎす
　　勝家

さて、大岩山の戦で勝利した佐久間盛政はどうなったか、盛政は弟柴田勝正の様子を確めるため盛政は少し引き返えすと、もう秀吉軍の攻撃で乱戦と云うより圧倒されて敗色濃くなっていたので二名の雑兵を誘って近くの森に入り走って戦場を離れていると、盛政はクイを足裏に踏み込み、歩けないので二人の下臣の肩にすがって歩いていると一戸の農家を見つけて寄ってゆくと婦人と子供だけなので針をかりてクイを除いていると、男達が十名程集ってきて従者を追い払い盛政を縛り上げ、秀吉の本陣につき出された。秀吉は一目見るなり大物がかかったか、と言って、「銭をやれ」と云って姿を消した。